其消盡る所必ず火災ありといふ、又群を成して鳴けば必吉と凶とあり、よて祝して鼬みめよしといふ時は、凶變じて吉兆と成ともいへり、四國にてとまこともひがんともいふ也、○略中鼬の道をきるといふは、旅發などの時に忌る諺也、往斷といふ義に取成べし、鼬の最後屁といふ諺は、本草に畏狗逐之急便撒屁數十、滿室惡臭不可嚮と見えたり、刊本此語を闕たり、安德帝の時、大鼬踊騰御前といふ事、山槐記にみゆ、鼠鬚筆も此毫尾を用ゐる事、本草に見えたり、魚にいたちあり、よく似たり、

〔兎園小說二集〕まみ穴、まみといふけだものゝ和名考、幷にねこま、いたち和名考、奇病附錄

著作堂主人稿

猫よりも、猶よく鼠を捕ふるものは鼬なり、その字鼬に從ひ由に從ふ、按ずるに、鼠に從ふよしは、形狀をもてす、由に從ふよしは、由は讀みて猶豫の猶の如し、鼬もその性疑ふものにて、人を見れば、走りつゝ、しば〳〵見かへるものなり、よりて由に從ふなるべし、譬へば狐の字の瓜に從ふが如し、瓜は讀みて孤獨の孤の如し、狐は群居せざるものなり、よりてその字瓜に從ふ、瓜は卽孤なり

又按ずるに、○略中いたちの釋名は、白石の東雅、契冲雜記にも見えず、按ずるに、いたちの言はきたちなり、又火たちにもかよふべし、イとキとヒと連聲なればなり、さて鼬をいたちと名づくるよしは、此けもの、夜は樹にのぼり或はむらがりて、氣を吹くときは、火氣天に冲ることあり、俗にこれを火柱といふ、この故にいたちと名づく、卽氣立（キタチ）也、又火起（ヒタチ）也、

〔本朝食鑑十一〕鼬鼠訓伊太知

釋名、鼠狼楊氏漢語抄

集解、人家每有之、狀似大鼠、而眼眩口邊微黑、身長尾大色黃赤、或有微黑斑、其氣極臊臭、一身柔撓偶入竹筩、反轉而出、故簷梁之小隙、巖石之穿竅、俱無不通達、能捕鳥鼠、惟吮血不能全食之、飽則捐餘而